

汲古一心

『御維新と唐様書き』(三)

中村素堂

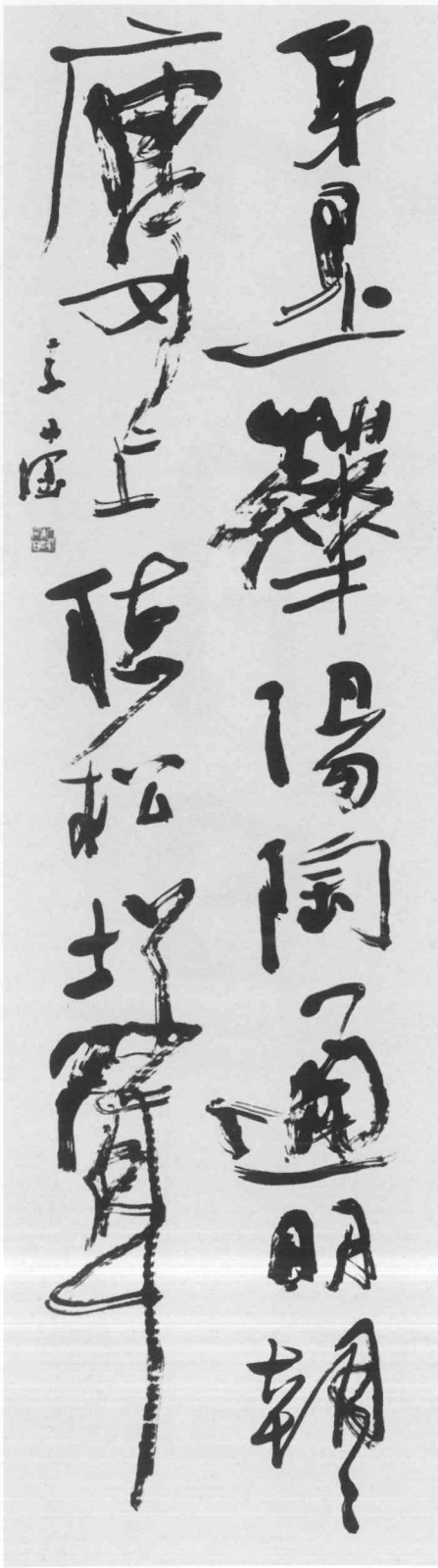
こうして列記しては際限はないが、つい戻り過ぎてしまった。さてここで純然たる書家として明治初期にまでその影響の大きかった人として、晋、唐あたりの名蹟は学びつくしたといわれている貫名菘翁を挙げ、これと同時に唐の諸大家の帖を学び瘦勁の風格を備えた巻菱湖、またこれと相並んで権門に用いられた市川米庵などは、いずれも支那上代に粉本を求めた当時の新人として忘るべからざる存在である。御宇一新して明治になってから、同じく支那の古いところを手をつけてすこぶる格調の高かったのは副島蒼海(種臣)伯爵である。これは今さら贅言を費すような人ではあるまい。そのうちに清国公使館員として日本に來た楊守敬という書家は、六朝あたりの金石の文字を示し書は碑碣等の古いものに学ぶべきことを持論として伝え、当時のわが翰墨界に一大衝動を与えるに至り、ついに中林梧竹、日下部鳴鶴、前田黙鳳翁などはわざわざ彼の地に渡って法を問うて帰るといような状況になり、西川春洞、巖谷一六翁等もみな同じく六朝および秦漢等にさかのぼって研究するに至り、成瀬大域翁その他の人々により六朝風は魔道であるなどという論難を

浴び、いわゆる人氣の転落にあいつつも、この辺を境として完全に幕政時代の書風と入れ替わってしまったのである。実に秦、漢、唐、宋等の古えに帰らんとした人々によって、旧い和様はほろびたのである。むしろ今日では御家流を書く人があつたら、賞せざるまでも珍奇とせらるるくらいは請け合ひである。

繰り返していうのであるが、この書壇から見た維新前後の状況は、ただに書壇ばかりの姿ではなく、実に旧を脱いで生々潑刺たる新時代を生む時代大勢の、この部門への現れであつたのであろう。今や仮名書道の方面も上代様への憧憬、模倣等から一転して、昭和の御代に生きた國民の魂を伝うるに足るものを作れと叫んでいる。唐様書きの時代から二百年も経過した今日の漢字書道界を見るに、いまだに榮養を彼に仰いで依然たるのは、いささか心さみしいものを感じるのであるが、昭和のこの空前の時局に処している烈々たる國民の魂は、知らず識らずの間にすでに筆管を通じて書道の上にも貯されつつあるであらうか。

以上ならべてきた斯道の人々がおおむねまた勤皇の士であつたことも、この際考え合わせるべき何ものかを含んでいると思う。

〔紀元二千六百年〕、昭和十六年



身是華陽陶通明
朝々樓上聰松聲(佐久間象山)〔昭和四十四年〕